序

『言語を問わず、世界に一つしか存在しない言葉こそもっとも高価な言葉である』――――J.P. モルガン

明かりを持たないこと、光の当たる場所にいないこと。

これを守りさえすれば、夜の行動はとても容易い。日のあるうちに行動するのは人間の賞賛すべき知恵であり、賢明とも言える選択だ、暗闇は静けさの中に凶暴性を隠し持っており、狂気と混乱、混沌を抱えている。ひとはそこにあって安らぎのために灯火を求めた。かつてその夜になろうとして赤みを増す空を見、不安感を募らせた情緒不安の画家がいた。彼はその空を、心情を描こうとして、空疎にもおぞましくも見えるそれを描いた。

だからというのでもないが骸は夜に動く。明かりがないデメリットよりもメリットの方が断然に多いし、慣れ親しんでいる環境でもあったから己に相応しいとも思っている。

「…はっ、…はっ」

足を止める。

何かが近付いてきている。

「……」

気配だけではなく、足音までするから深夜のランニングかだろうか、しかも背後からだ。現在の時刻は午前三時、十時に映画が終わって酒を呑むのだとしても、とっくに寝床で鼾をかいてもいいころだ、汗をかくのに適した時間でもない、面倒なことにならなければいいが――――。

「…わっ」

何かに躓いたらしい、がたりと音がした。道は入り組んではいるが教会までの石畳のましな道と、そうでない、巡礼者が踏み固めてできたような狭いのがある。骸が歩いているのはもちろん隘路の方であり、ゴミがあったり、空き瓶が転がりドイツ

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

製の自転車やらが横倒しになって、木箱に潜んでいる猫なども小さなトラップになっていたりする。
足音は教会に向かって背後を通り抜ける。
街灯を頼りにして見えた限り、子供だった。後ろや周囲を気にしながら闇夜を駆けていったと思う、大きな荷物を抱えていた。
「忙しいですねえ…」
知っている男とどこか似ていると思う。小柄で、ぱたぱたと走る、そして遅く転びそうな足取り。
「骸さま」どうかしましたか。
千種の声がした。雑音はあるが、この無線機は肉声に近いくらいによく聞こえる。中国か中東で改造したものだが、元が日本製なだけに軽くて丈夫で邪魔にもならない、大した技術力だ。
「何もないですよ。クロームは？」
「眠っています、起こしますか」
これから日本に戻る彼女には二言三言注意しておかなければならないことがあったのだが。
「仕方ありません。お前達はそのまま引き上げなさい。足はあちらが用意しているはずです」
肯う千種の声に被って、はしゃぐ犬の声が聞こえた。骸しゃんは来ないんれすか、と状況をあまり分かっていない発言だ。
尤も骸自身も見張られている気がしていないのだが。
「僕はもう少し付き合ってやります」
相手もそれなりの商売だし、動けば情報は漏れるものだ。情報も戦力も何も出来る限り搾取しておきたい。
「お前達には別にやるべきことがありますし」
犬のわめく声がする、飽きたのだろう。黙れと小声で窘めている千種の声が続く、骸は息を吸ってからぴしりと躾けるように言った。
「千種と犬はクロームと日本に居なさい、不自由だが居心地は悪くないはずです」
「…むく…」
「行きなさい。僕の手を煩わせることは許しません」
彼らを日本に帰す、クライアントは金に糸目は付けないと言い切っただけある。富豪なるものはなるほど無謀の度合いが大

きく、金払いも良い。問題はどこまでボンゴレ（目付け）が絡んでいるかということだが、巨大組織にあるべき怠慢さをここで示してくれれば言うことはない。

「あっ！」

抜けて、さてと大時計を見上げようとしたところで飛び出した影にぶつかる。

「……」

がたん、とまず投げ出されたのは看板らしき板状の荷物だった。骸は暫く尻餅をついた子供を見詰めた。相手は包みに寄ると無事を確かめる。壊れてはいないらしい。しかしなんて軽いのだろう、十かそれくらいに見えるのに。そんなことに実は驚いていた。

「あ、あの…」

息も絶え絶えに少年は言う。通りに面した深夜営業の店の眩しいくらいの明かりが子供の顔を照らしていた。

「…っ…」

慎重そうに荷物を引き寄せる、びくついた目、こけた頬、しかも顔も衣類も薄汚れている。

というより単なる遠回りである、どうしてあの道を曲がってきたのか。

「ご、ごめんなさい…」

口を開いた瞬間、ふっと独特の油の匂いがした。手にしているのはやはり板看板かカンバスなのだろう、布に包まれてはいるが倒れても割れた音はしなかった、ガラス細工というのでもない。広告用のパネルとかかもしれない。住み込みで工房での修業をしている子供が親方に言われて急拵えの品を届けに行く、そういうことはあるかも知れない、だが実際に起こりうるような時間ではないだろう。

「…その」

――追ってきたのか。

「来なさい」

骸がいま仕事を終えた場所も同じ匂いがしていた。

「え…？」

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

栄養不良という顔色だった、痩せて、骨が浮き立っている。
仕事は終えたが、終わらせてないならきっちりと終わらせないと骸の恥となる。

日本からの手紙を微笑ましく読み、そういえば送られたあれはどこまで育ったのだろう、と今朝見たにもかかわらず温室に向かう。
「九代目」
戸の目の前まできたボンゴレボスを側近のひとりが呼び止める。
「何だね？」
「ガナッシュが応対していますが、警察からボンゴレ側に協力を頼みたいとのことで」
探りなら分かるが、警察機構がマフィアに直々に頼み事などない。理想の高さはお互いだが天地がひっくり返ろうが相容れない組織であり、その腹はいつだって知れないものだ。
ボスはステッキを持ち替え、踵を返す。イタリアの軍や警察機構ならダイレクトにコンタクトが可能ではあるが、形式的だったりする事が多く、使者を立てて遠回しにやり取りをするのが従来からの習わしなだけに不自然の度を超えている。
「電話で失礼。初めまして、ミスターボンゴレ」
通話を代わるとはきはきした英語が届いた。
九代目の名などどうでもいいと、そんな風に早口で続く。
「ロンドン警視庁のリチャード・バーマンです」
「ミスターバーマン」
「リチャードで」
声を聞く限り相手は四十半ばかそれくらいの男で、語尾の発音に押しの強さを感じさせた。叩き上げというよりもキャリア、くすんだ髪色に眼鏡をかけた痩せぎすのイギリス人が想像された。

「先ほども言ったように、我々が請うのは協力です。結果的にあなた方の遺産が安全に保護されるということにもなるのは言うまでもない。また『Trace』の名を示すことからも理解していただけるかと思います」
「ミスターリチャード」
「はい」
と、思わず溜息を一つ。
「…久しぶりだというのに、それはないだろう」大事な部下を揶揄わないでくれ。
リチャードは了解したのか少し黙るとこれでいいのか、おっさん、とがらりと声色を変えて言った。
「揶揄っちゃいないさ」
「元気そうだ」
「そうでもない。老眼にはなるし、ウェイトも落ちた」オーガニックでも不味い物は不味いからな。
誇りはあるくせに、一蹴しなければ気が済まない。
一方は警察、こちらはマフィアである。こんな風に道が分かたれるとはあの頃は思わなかった、それなのにこんな年になっても離れてもいない。互いにリスクを承知で続けた仲だ、困り顔の守護者と渋い顔の守護者が物も言わずじっと耳をそばだてているのが分かった。
「好きな気苦労に同情はすまいよ」
相手は尤もだと笑い飛ばす。
「あんたんとこのチームと合同が決定した。捜査にうちの新しいのを送ってるんだが、どうもぷんぷんしてやがる。軍人あがりとはいうがオレには嘘が見え見えで、おっさんと同じ匂いがしている。ベテランを付けちゃいるが、無茶されたり横取りされちゃ捻り出した金が泣く、王室の嫁さんの宝石が減っちまうよ、離婚問題に発展しかねない」
「そりゃ大問題だ」
「オレの首ぽっちじゃ賄えねえなあ」
紳士の国の奉仕者はペラペラとスラングを並べ立ててとどめに低く笑う。
「あんたの仕事に掠るかも知れんが、こっちも商売だ。敏腕探偵とやらも保険会社からの依頼で動いてて、威信ってやつがかかっ

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

ている。目をかけてくれとは言わない、あんたらの目を光らせておいてくれ。耄碌にはまだ早いだろ」
物音一つ立てず、室内にいたひとりが立ち上がる。
彼のことだから情報を仕入れるつもりなのだろう、差し障りのない程度にだろうが、ことがことならそれなりの対応をすることになる。
「ただ、信用がないわけじゃあない。どっちに転ぶか分からないんだ、奴はこっちの目じゃないことは確かなんだが…」
わかっている。
「物は聞かないでおこう。捜査員の名前くらいは言えるな？」
「あー…こっちが用意した名前で通す、それで十分だろ？」
あとはそっちで調べろと言わんばかりだ。欠伸の声までする。
「……」
彼が資料を手に戻るまで恐らく数分、この国の警察とイギリスの警察が合同で動く事件といえば、知れている。そもそも欧州、いや世界でこの手の特別な機構を持つ国は多くないのだ。
「目の覚めるような味のコーヒーでも飲み干すぜ、そこはイギリス人だな。そういや…」
それにしてもあれほどしゃきしゃきした言語をよくもここまで崩せるものだ、仕事で備わったのだろうがこの切り替えはもはや芸だ。
「特徴がひとつある、コブ付きでな」
「子連れ？」
自然と眉が険しくなる。
「サービスに写真も送っとくよ…っと」
「捜査員にしては…」
遮られた、受話器の向こうでがたんばたん、と騒がしげな音が聞こえる。
「はい。こちらの情報では、日本に所縁のある人物が居るとか」
しゃきしゃきした英国英語は訛りもない。

「日本だけではありませんよ」
穏やかに返す。ボンゴレの本拠地はイタリアだが、北欧にだって、中東にだって関係者はいる。日本にいるのは初代の意志を引き継いだ、大事な血胤とその仲間たちだ。
「捜査員は現在、アジアに向かっていますので接触することもあるかも知れません。可能性は薄いでしょうが…」
「いつか、きみは万物はその求める場所に還るものだ、と言いました。…それまで数奇な運命を辿るともね」
「……」
覚えていないのか、相手は無言だ。
「捜し物が見付かることを祈ってますよ」
とんとんと固いものを指先で叩く音がする、相手はゆっくりと間をおいてからシェスタの時間ですね、と返す。
「我々が相手にするのはいつだって人ですよ、ミスターボンゴレ」では失礼。
リチャード・バーマンは生まれも育ちも英国だが、祖父はイタリア人で、しばらくイタリアに暮らしていたこともあった。そのせいか彼にとっては幸か不幸か、トマト味に煩く、舌が確かだ。勘も鋭い方で、まずはジャーナリスト志望、ぐれ切った青年期には船乗りになりたいと言っていたのが失恋と軍役を経て乗り上げたのはロンドン警視庁のポストだった。

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

その作品群は無事ですが…

- The old masters are not lost,but... -

1　美術館の傲慢と寛容

芸術の秋、という。

空は高くなり、蝉でなく虫の声が足下から聞こえる。日が暮れるのも早く制服も冬服になって、部活動の活動時間も終了時間が繰り上げられるようになる。二学期は学校行事が多い、朝夕の気温差がはっきりしはじめた頃、並盛中では文化祭に講演会だの芸術鑑賞会なんてのが行われる。学年によってさまざまだが、ツナ達の学年は美術館に行くことになっていた。

「…のに何故この時期…」

ぬるっとした風が通り抜けていった。

謎のオブジェが視界の左右に立っている。公立の施設らしい広い造りのエントランスに建物もひと中学校の一学年分の人数を入れてもまだじゅうぶん余裕のある横長の建物だった。夏が訪れようとしている日差しがカッと窓やアスファルトに照りつけ、一昨日まで降っていた雨のせいでぬるく湿った空気に肌がべたつきを残していた。

「暑いっつーか、蒸れるっていうか…」

秋にも予定されている芸術鑑賞会に更に今年は施設のお祝いだか記念だかのオプションで学校招待があった。並盛中も日を分けて全学年が見学することになっており、…こんなことになっている。

「…ってさ、ここ秋にも来るんだよね」出来ればそっちの方が良い。

と、ツナは息を吐く。暑いし、眠い。朝からごたごたしてて、それでいてランボにとどまらずビアンキやフウ太まで来たいと言い出したりして現地集合は大変だったのだ。

「他の見学者に迷惑をかけないように。迷うことはないだろうが先生もそれぞれの場所で展示を見ているから分からないことがあったら聞くこと」

では、と先生が合図のように手を挙げると整然とホールに並んでいた生徒達は散る。笹川京子ちゃんは目が会ったツナにこりと笑うと黒川花とで正面のドアに消えていった。ガラス張りだからってわけではないけれど彼女が入っていった先はきらきらして輝いているように見えた。

「かったりー…」

両手を頭の後ろに組み、獄寺はぼやいている。美術館と同じ敷地内にある私設の小さな博物館、この二つの展示を見てプリントを提出、楽といえば楽だし、室内なのでまあ涼しそうでもある。

「まあまあ」

「絵なんて分かんねーけどさ、授業が潰れるのはラッキーだよな～」

どっち行く？

山本は機嫌良くパンフレットを広げるとツナ達を見た。遠巻きに鑑賞される獄寺はともかくも『やまもとくん一緒にまわらない？』とこういった自由行動が許された場所での女子からの誘いの言葉がかから

ない山本はたまに不思議だと思う。
「つか、オメー昨日誘われてたんだからそいつと一緒に回れよ」
と、獄寺はどこにでも行けと言わんばかりに冷たい。
「誘われてなんてねーぜ？」
「そうなの？」
昼休みに廊下を歩いていたところを呼び止められ、ツナと獄寺は山本を残して教室に入った。隣のクラスだったか、その二人組はどうしたって山本のファンだ、何しろ見る目が違っていた。羨ましいなあと大変そうだなあとが入り交じった感想を抱いたのを覚えている。獄寺は一貫して無関心だったが。
「なんか変なことときいちまったみたいなんだよなー」
今日のことについて逆に彼女たちに訊いてみたら変な顔をされたと山本はこめかみを掻く。
「へー…」
いったい何を訊いたのだろう。
入るとさっそく涼しい風と世界的に有名な名画を見ている人々ごと描かれた絵が出迎えた。正面に広く取ったインフォメーションカウンターがあって、そこの門番宜しく先生が一人腕を組んで立っている。入口で騒いだり、屯ったりしたら風紀委員長以前に先生に注意されるのだろう。階段の横にはコインロッカー、奥は売店、手前の病院の待合室のような場所には飲み物の自販機と長椅子が並んで上から吊られたテレビモニターは今月の展示とか説明にはあるものの、ニュースを流していた。
「…また、同公園敷地内のゴミ箱が不審火で焼けるなど不審な点があり、警察が捜査を進めるとともに市の管理局でも情報を呼びかけています」
キャスターから画像が切り替わって被害があったらしい建物が映し出される。知らない街の知らない美術館の正面玄関は、整えられていてきれいで、悲劇的な様子もなければ憂いている感じもなく、当たり前に表情がない。文化施設ってのはどうしてこう見ればそうと分かるような入り口だったりするのだろう。あ。でも見てらしいとか分からなきゃ誰にも気付かれずきっと困る。だよなあ、とツナは小さく呟いた。
「何が？」
と、山本がけろりと訊き、あっちでチケット見せるんだってよと続けた。見りゃわかる、とすかさず獄寺が返す。だよなあ。
「獄寺くん、絵って詳しいんだっけ？」
そういえば、と思う。配られたチケットを取り出しながら思い出しついでに聞いてみる。
「地上絵とか壁画なら得意っす」
「絵は下手なのになー」
「るせぇ」黙れ。
入場の列が出来ている、入るのはみんな同じ制服だ。
「…警戒を強めています。なお、この区域では三日前にも同様の引ったくり事件があり、その手口から同一犯であるとみて…」
「博物館の方、地球の歴史と宇宙の展示ってあるぜ、獄寺」
「……」
ツナは見るともなくまたテレビ画面を見、その斜め下の壁に貼ってあるポスターを獄寺に示してみせる。確かにそこには地球と隕石と人工衛星が描かれてある。獄寺は未確認生物の類いやブラックホールな

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

んかも好きだったはずだ。
「そっちから先にしようか、獄寺くん」
言うとつまらなさそうな表情が一転、きらりと瞳が輝いた。
「い、いいっすか…」
決まりなー、と山本はくるりと方向転換をする。生徒の殆どは美術館の方に入っているらしく、ときおり歓声までが聞こえてきた。歓声が起こるほどのそのすごい物のための招待、というのがきっと正しいのだろう。観なければいけないのが美術館の一階と二階、そして博物館。
「博物館ってどこだ？」
配置図もあるプリントを三人で慌てて見直す。ランニングコースみたいな道路に沿って池と芝の広場の向こうに行かなければならない、とはいえここから見えない場所でもない。
「道沿いに行っても結局入口まで建物を回ることになりますね」確かに。
「一回出た方が早くね？」
「そうだね」
あっさり出ちゃえ、ということになった。歩くと案外に敷地は広く、見学時間は限られている。
「『晴天の霹靂マシーン』」
「何だそれ？」
「電気振動を伝える装置だそうです」
山本は無視し、ツナだけを見て青天の霹靂とは晴れ渡った空に突如起こる雷をさす意味の言葉です、と獄寺は言い、アホ牛の癇癪です、と続けた。そうした昔の電気実験の装置にさえ目をキラキラさせている、彼にとっては博物館はおもちゃ箱みたいなものだろう。
「そういや今朝、クロームがうちに来てさ」ランボで思い出した。
「朝から？」
「どうしても渡さなきゃいけないものだからって三人がかりで持ってきて置いてったんだよね」こんなの、とツナは両手を広げる、新聞紙一面ほどを両手で描き、どうしていいか分かんなくて、と息を吐く。
「絵とかですか？」
「見てないけど…そんな感じだったな、預けて欲しいって骸が言ったんだって」
「へえ」
「リボーンが調べておくって言ってたけど…」
「宝の地図とかだったりな」と山本が笑うのを
「ますますわかんねーよ」
獄寺が冷めた声で突っ返す。
どうして骸がツナに絵だの地図だのを寄越すのだ、とそれはツナも同感だ。まだ中も見ていないものを今から気にしてもしょうがないが、相手が相手だけにちょっと怖い。
「…あれ、ヒバリ？」
山本が歩調を緩めた。いつもの学ランを翻し、いつもの風紀委員長がオブジェの前をすたすたと歩いていた、このひとと芸術って似合わないというか、噛み合わないとツナは悪く思いながらもちらと考える。それはきっと彼はイメージとして壊す方で作る方ではないからだろう。
「来てたのかよ」つかこんなとこ居て来る意味あんのかよ。
呆れたように言いながらも獄寺の視線は真っ直ぐに向こうにある博

物館だ。
　雲雀は誰かと話していたのか携帯電話を手にしている。風紀委員の雲雀は風紀委員長だからして参加しているのか、こちらの視線に気付いても見返すこともなく何も言わず踵を返すと歩いて行ってしまう。黄色い鳥がそれを追うように飛んでいた。
「……」涼しい顔してるなあ。暑くないのかな。
「ま。とりあえずこっち終わらせちまおーぜ」
――――かしゃり。
　空みたいにからりとした声で山本がプリントを振る。足が乾いた葉を踏み砕き、小気味いい音がした。ちょっと驚く、暑さも盛りに入るという時期に落ちる葉もあるんだとツナは足下に視線を落とした。
「…ん？」
「おい、ちょっとそれ見せろ」
　獄寺が言う。ツナも顔を上げてそれを覗き込んだ、なんか埋まってるなとちらりと見えたとき感じたのだが、改めて見ると溜息が出そうなくらいに。
「よく見るとすごいなこれ…」
「クイズみたいですよね」
　三人がまったく読んでいなかった配布プリントには鑑賞会についての感想の欄だけでなく見ないと分からない設問までがある。端々に待機している先生といい、いくら自由とはいえ遊ばせないための工夫がそこにはちらほらとあった。本当にクイズじみている。進んで解いてと、まるで自分たちはゲームのキャラクターのようだ。
「ここ？」
　プレートには読めない外国語と見たことのある企業のロゴが入っていた。
　美術館と同じ敷地とはいえ、博物館には立派な門があった。まるでそこだけを囲っているような緑と柵があり、隣は駐車場で、警備の人はもちろん、ここにも先生が待機しているのがすごい。獄寺はそれを一瞥し、小さく舌打ちしていた。
　門を入るとすぐに案内板と守衛室なるものがあり、ぎくりと足が止まる。中にはディーノの背後にでもいそうながっちりしたひとが構えており、見咎められることもなかったが、かといって気易い気分でも入れない。ともかく、何故かそこから動いてはいけないような気がした。
「…？」
　なんだこの感じ。変だ。
　戸惑いを迷っていると思われたか、右の木立に遮られながら見える建物が博物館だと教えられた。図の通りだ。通路と花壇に仕切られて手前に、向こうに低い建物があるが、看板は読めなかった、雰囲気からしてそこには入ってはいけないらしい。
「こんにちはー」
「特別展示やってるんですよね？」
　一般の見物らしい三人連れが楽しげに過ぎてゆく。しかも慣れた風で、なんだか立ち止まった自分が恥ずかしいくらいだった。
「十代目」どうかされましたか。
「う、ううん」
　足を動かす。ああ普通だ、良かった。
「…『この博物館は元はなんとか家の別荘だったものを何年に移築、もともと邸宅美術館として一部を開放していたが、現在ではコレクショ

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

ンのうち、絵画を美術館に移し、東洋の装飾品や陶器、並盛の出土品などを展示している『だそうです、十代目』プリントには空欄があって、昔の道具がなんとかかんとか。そこを埋める答えを探し出す必要がある。

三人でパンフレットや解説パネルを読んだ。古い写真とカメラの元祖があるとか。

「セイテンノヘキレキマシーンに日本初の光学レンズと電子顕微鏡…」

「なんでもアリだなー」

「完全に元の主ってひとの趣味だよね」

古くて、きちんと展示されているのだろうけどなんだかおもちゃ箱みたいにツナには思える。レンズ、望遠鏡、地球儀のような形のものは『渾天儀』というらしい。

「娘がいないんだ」

黒いコートを着た男が別の警備員と話している。聞いたことのあるような声は低く落ち着きのあるもので、誰だったかと考えていると、促されて男は博物館とは反対の方に消えていった。

「あっちで黒点が覗けるそうです。時間が合えば人工のオーロラも見られるそうですよ」

「へえ…」

「嬉しそうだなー、獄寺」

と、山本が笑ったところで時刻を報せるチャイムが鳴り渡る。いたとかなんとか獄寺をこっそり探しては追ってきたらしい女子たちの声がする。続いて背後から聞こえたのは美術館でも聞いた女性アナウンサーのニュースを読み上げる声だった。

「…では次のニュースです。オークションに出品された絵画の贋作疑惑が浮上しました。問題となる絵は、競売会社のノースティーズが先月二二日にロンドンで開催したオークションで個人所蔵だったものをオランダの美術館と個人収集家が競り合った末に…」

獄寺隼人と別れて、沢田綱吉は家までの道を真っ直ぐに歩く。

すると家が見えてきたところで、がはは笑いと不穏な歌声を聞いた。例の、あの、上機嫌な、あれだった…そうな。

その声の主は、周囲のさまに唖然呆然とする沢田に気付くとせっせと動かしていた手を止め、「あ。ツナだ」と言い、そして悪びれもなくじゃーね、とガハハと笑いながら飛んで逃げようとした。

「待てィ」

それを捕まえて年長たるべく咎める口調で沢田は言ってやったのだと主張した。

「なにやってんだよ、なにやっちゃってんだよ、ランボ」他人んちの塀だろここは。

「知らないもんね～、ランボさんあったからやったんだもん」

「しかもクレヨンめちゃくちゃにして…」ペンまで…。

落ちていたのか、どうしたのか、こどもはそこにあったクレヨンで壁と道路に前衛的で理解不能なグラフティアートを制作、展開していたという。

「…ボス」

「離せぇ、ツナのバカ～」

「離すか！」
叱る沢田に逃れるこどもとでやんのやんのとやったらしい、背後の人物には気付かなかったそうだ。
「ボス」
「え」
声に振り向くと彼らの後方には霧の守護者とかいう黒曜中の少女が立っていた。
「クローム」
「こ、これ、今朝渡しそこねたの。あの、イーピンちゃんたちにボスから渡しておいて…」
「文化祭？」
ランボの身体を押さえつけながら差し出されたものを受け取る、小さな名刺大の紙片には無料とあり、黒曜中文化祭実行委員の捺印、学年とアイス、クリームソーダ、そんなのが並んでいた。
「あっ！　こら、ランボ！」
緩んだところをこどもがすり抜け、沢田への悪口を忘れることもなく逃げていく。ああもう、と彼らしく沢田は追うのを諦めた。
「クロームのとこ文化祭、早いんだね。模擬店なんだ？」
「……ぶしょうきっさ…」
「〝ブショウ〟？」
クロームはこくりと頷くと戦国武将の喫茶だという。武将とアイスかあ、と思ったとはいうものの、沢田のクラスだってそう変わらないなんとか茶屋とかなんだかをやるに決まっている。並中の文化祭は二学期で、近くなれば朝や放課後の時間をあてて準備するようになって、いろいろと忙しくなる。

じゃあと彼女が去り、そこへ登場したのが並盛の風紀委員長――つまりは自分であると。
雲雀は学校にいたところを、委員からの報告を受けてやってきた。それも、ほんの少し前まで応接室には警察官が来ており、校長とで説明を聞いていたのだ。
「警察」
「え？」
「きみのところは何ともないの？」
「あ。えっと…」
「このところ神社仏閣の宝物が盗まれたり傷付けられたりしてる。並盛神社も額を壊されたんだよ」
目がびっくりだと訴え、身体が硬直したようになっている。
「落書きがあるって来てみたら…、これ君がやったの？」
「違います！」
と、こればかりは力強く、さらに手にしていた紙をぶちまける。沢田はあわあわと拾い集めると紙片をぎこちない手つきでポケットに仕舞いながら、オレじゃなくて、ランボです、と言った。つまりはきみじゃないか、管理も出来ないのか。
「どうも持ち主が落としたか忘れたかしたのを見付けたみたいで…」
鞄を肩にしゃがみなおすと破れたスケッチブックと折れたクレヨンを集めながら焦るように言う。普通に言えば雲雀にだって他人の仕業と分かるのにそんな風に上擦ったような声になったりするから武器が出てしまうというものだ。
「叱ったんですが、あいつ、逃げて…」まったく。
「……」

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

足下に転がっているクレヨンを見ながら溜息を吐く。幼児用の色が少ないもので、よく見れば近くにある箱も新しい。おろしたてという風に見えた。

「洗えば？」

「あー…はい…」でも懐かしいですよね、クレヨン。

白、赤、紫、青。あ、やっぱ肌色あるんだなー、と沢田は小さく笑う、誤魔化しているのか。

「とはいえ、油だからきみには無理だね。最小限のペナルティで許してあげるから」

「えっと、それは…」

のろりと返そうとしてはっと見る。気付くのが遅い。

――ご。

伸びずに痛がるくらいには成長しているものだと思う。

「いてぇ…」

手加減は当たり前にした、たぶん。打たれ強いのが信条であるかどうかは不明だが、痛めつけられることをこつこつと続ければ小動物なりにも耐性が出来上がる。雲雀は武器を携帯電話にかえて壁の清掃を命じ、そして赤ん坊は、と問うた。

「今日は見かけないようだけど」

「…調べ物しに、出かけました」

ふうん、と雲雀は言うのを涙目で見、沢田はどこか不思議そうな顔をした。

「じゃあ…」

風の音に混じって小さく校歌の端切れが耳に届いてきた。野犬の駆除などやり残したことはまだある、学校に戻ろうとして雲雀は踵を返す。

ヒバリさん、と沢田は言った。「リボーンに用があるならうちに来ますか？」

遅れて鳥が飛んでくる、雲雀の肩か頭に来るところを何故か沢田の顔に直撃した。器用な芸だ。

「なんっで…」

鼻を押さえながらしまらない格好ではあるが、そんなのも却って可笑しくて、うんと応えてしまう。

「あの人に聞いたことがある」

「へ？」

「イタリアにも文化財警察があるって」

「……」

「イギリスの警察にそんな課がある。世界中の美術品を探し回っているんだ、日本の国宝に近いものなんかも出回ってるから」

沢田を越して沢田の家に向けて足を進める、軽い足音と気配がついてきた。

「並盛に、そんな世界に渡っちゃうようなすごいものがあったんですか？」

「きみ」

「――はあ？」

「…ってことはまずないけど。古い物ならいくらかはあるよ、絵とか」

それはヒバリさんのお屋敷とかお屋敷とかが所有とかではないのでしょうかと沢田はごにょごにょと口ごもるように言い、そして黙った。

「今日行ったろ。絵ならあの美術館にある全部と、博物館に二点。修復中のが一点あるけど、一定の期間しか本物は出さないのが二点ある。

今回の展示は特別で、だから招待なんだ」通常は複製展示だよ。
「そうなんですか…」
なんかすげえな並盛と、見てきたばかりだというのに感心している。美術館も博物館も特別展示だということを聞いていなかったらしい。
「イギリスから来るのにうってつけの理由にもなる」
沢田ははあ、とそこは追加のように頷く。半分くらい判っていないような気もする、というよりも、今日の見学の意味はあったのか。
「詳しいんですね、ヒバリさん」
「……」
聞かされたばかりなのだからすらすら言えて当たり前だ、国の美術館や博物館がどう困ろうが知ったことではないが、悪意ある何者かの手によって、並盛が壊され、乱されるなど風紀委員長としてほっておけない。それに引っかかっていることもある。
「別に」
応接室に来た警察官は二人で、ひとりは外国人だった。向こうの反応を思い出すに雲雀がいったい何の国際犯罪なのか、引いては警察のどこの課だ、本当に警察官なのかという不審の目を強くしていったから、慌てて身元を明かしたようだったが、美術品に関わる捜査を担当してます、とは言っていた。こちらは確認に赴いたまでで、今日ちょうど見学で来たと美術館側から聞いたので――――。
神社の額は壊されたが、並盛の美術品は無事らしい。
「ただいまー。リボーン帰ってる？」
「うるせえな」おやつタイムを邪魔するのか、ダメツナ。
甘い匂いをまとって赤ん坊はコップジュースとともに沢田の上に登場した。
「――――へぶっ！」
「珍しいな、ヒバリ」
「やあ」
赤ん坊なら何か知っているかも知れない。
副委員長からの報告によれば二人は確かに警察官だった。日本人は警視庁所属、外国人の方はロンドン警視庁美術骨董課――――。
ロンドン警視庁美術骨董課、通称は美術特捜班（アート・スクワッド）。美術品専門の国際的な捜査機関で、雲雀も耳にしたことがある。名画、傑作と呼ばれるものが消えたり、現れたりする話はそこいらに転がっている。ほんとうの価値はともかく、世界で日々美術品は盗まれ、闇のルートで現金の代わりにされたり、虚栄心を誇るだけのオブジェクトとなっている。
美術界が憂慮するのはヴァンダリズム（芸術破壊）だけではなく、むしろ現代では盗難の方だといってもいいようで、被害総額は年間約十億ドル、回収率は十パーセント、その発生は被害額ともに国際犯罪のなかでも上位を占めていた。
雲雀の予感が外れていなければ、嫌な方向に事態は転がっている。

どうしてこんなのを。
「嘘は結構です」
と骸は手を振ってみせた。その反応を見て途端に相手は萎縮する。
「別に殺そうなど思っていません、こちらに害意があってにしろ君の行動はあまりにも軽率で、しかもお粗末だ」
「……」さらに小さくなる。

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

「そもそも僕には毒物も効かないときてる」直ちに返り討ちにできますよ。

もとい、どうしてこんなことを。

後悔や嘆きというよりも自問だ。少年は荷物を抱えながらも従順と言っていいくらいの素直さで骸の言うままについてきた。背後や横の気配には怯え、気にするようでもあったが、真っ直ぐに骸を見上げる目は訴えかけるようで、手頃な隠れ家を見付け、落ち着いたところでぱたりと気を失った。

警戒心のない追跡者にどうしたものかと骸は腕を組み、腹の虫を鳴かせながらも眠り続ける子供の横で一日を過ごした。もう夕方だ。千種たちとも連絡が取れ、彼らのこれからの予定まで聞けた。その間、起きようともしなかったものだが、本人の腹は物を言う。やがて床を寝床にどこからか漂うスープの匂いに鼻をひくつかせて目を覚ます、そうして大慌てで荷物を探しては大事そうに抱いた。

「だいいち、逆に僕が君を殺したところで何のメリットもないですし」

そういうわけで、食べなさい。と用意していた皿を押しやると相手は困ったように骸と皿を交互に見詰めた、腹がぐうと鳴る、この湯気と匂い、空腹には勝てないだろう。

「……」

相手はよく聞き取れない声でいただきます、と言い、摘むようにスプーンを取った。ひとすすりし、骸を見る。黙って傍らにパンを置いてやると、スプーンを持ち直し、顔を皿に入れんばかりに食べ始める。その勢いは犬以上だった。

「普通の売り物なんですけど、そんな風に食べられては食材も満足でしょうねえ…」

骸は食べない方だし、食事に関しても好き嫌いがはっきりしているため無頓着な部分がある。子供は一心にパンをかじり、ジャガイモを口に入れている。好き嫌いはなさそうだ。

「量はそれほどありませんよ」

「おかわり！」

しかも、骸の声など耳に入っていないようだった。

「……」

何をしているんだと思わないでもない、が、し残した仕事だと思えばまあ我慢してやれる。記憶を弄るなり始末しても良かったが、そうせずに連れ帰るなんて人が好いにもほどがある。骸は溜息をつくと皿を拾い上げ、――と、隣の部屋を示す。

「それを持ってでも良いからキッチンのテーブルで話を聞きましょう」

今日居た限りではまだ骸の所在も、少年のこともあちらに気付かれていないようだ。少々の時間ならある。

「君をどうするかはそれで決めます」

残りを皿にあけて差し出す、少年は逡巡したように皿を見、テーブルの横に荷物を立てかけようとしてからテーブルの上に横に置く、ということをしてから料理に取りかかる。いただきます、と今度は聞こえる声を出した。耳にしながら、ああ、これが似ていたのだと思う。

「…どうぞ」

そもそも人種が違うのだから髪色はともかく、目の色からして似ることなどないのだ、あの男とは。軽い足音、危うげな行動に惑わされた、とどめが声だ。まだ高く、どんなときでも表情があって、どこかのんびりしている（ように骸には聞こえてならない）あの声の質とまっ

たく同じだった、声帯は人種と国境をやすやすと越える。
骸は立ったまま腕を組む。
「君は僕に気付いたんですね。それで、大荷物を抱えて追ってきた。これは絵ですね、見ていいですか？」
いいかとは言ったが相手が首を横に振っても見るつもりだった、幸いにも頷かれたが、答えなど待たないつもりで投げかけた問いだ。骸は包みにしたボロ布を剥ぐ。姿を現したのは思った通りに額装されていない絵画だった。骸が持つにしても大きい、額は重いから取ったのかそれとも元からないのか。地味ではあるが絵は浮き立つような白の陰影が迫る、様々の種の白を用いているというように。作者の特徴なのかよく見ると絵の具だけにしては通常より厚みのある感じがする。
「……」
相手の意識が皿から骸の手元だ、苦笑とも吐かない息が漏れそうだった。
「何もしませんよ」
絵自体は何てことはない、陽当たりのよい場所に一人の女性が日傘を手に庭に立っている姿があるだけだ。破壊しても骸には損もなければ得もない。
「…おや」
骸は横向きだったそれを縦にし直す、明るいのは重ねられた数多の白色だけ。しかし厚みからして数世紀前の画家が用いたという技法でも応用されているようで、素人目にしても光の表現は絶妙だといえた。タッチはやや粗めなようだ、黒に灰に濃い緑と背景には落ち着いた色が用いられている。女性の身体は気持ち反りぎみで、森に飛び出し喜ぶと同時に惑うように見えなくもない。
遠目に見る。知っている絵ではない、骸が数日間、目を通したカタログ類にも一致するものがない、塗りといい、画家の習作だかオリジナルあたりだろう。
「…これは？」
走り出す、そう解釈できないこともないが。宗教的なモチーフに思われたがなにしろ知識は付け焼き刃だ。仕事に美術骨董品が絡むこともあるが、価値のつけにくい面倒そうなものは取り扱いたくないので情報は必要なぶんしか持ち合わせてなかった。
「おかあさん、です」
まあ悪くない。
「君は絵を描きますね？　最初のあれは食器の持ち方じゃない、木炭かチョークです」
骸は絵を見詰めながら問う。使われている絵の具は油性、悪酔いしそうな匂いからしてそうだ。絵の具が乾ききっていない部分がある。
「…はい」
「あの地下室に子供がいたのは驚きました。不幸な贋作職人がいるのは知ってましたが、彼の妻子は別の場所で暮らしていますから」
からん、と音がする。
「師匠です」
その不運な師匠はあるマフィアのせいで家族と離され、贋作画家に成り下がることになってしまったのだと、そこまでは知っているのだろうか。
「ぼく、おかあさんが…あのお屋敷にいるから、よく行ってて、行くのはダメだって知ってたけど、どうしても気になって…」
「なるほど」

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

たどたどしくも拙い言葉たちは、要領を得ないようで肝心な箇所をしっかり押さえている。
「君の母親は、あそこに働いていたのですね？　それで君は母親の言いつけを守らず、内緒で出入りしていた。仕事とはいえ帰りが遅くなったり、あるいは怪我して帰ってくることもあったから…といったところでしょうか」
相手は肯定も否定もせず、暗い目をじっと骸に向けていた。
「心配だったのですね。そうしているうちに地下に住んでいる画家と仲良くなった、絵を習うところを見ると…追い出されなかった様子だ」
こくりと頷く。
「しかし、雇い主がそんなことに気付かないなんて事があるでしょうか？」
「……」
応えるようにすうと血の気が引き、顔が青ざめる。
少年が口にしたくない、しかし、屋敷の中で確かにあったいくつかのおぞましい、いやな事を骸は知っている。調査するまでもなくある者は誇らしげに吹聴し、ある者は讃える。嫌悪すべき下卑た事をだ。それを痛覚として感じるかどうかはひとそれぞれだが、ある世界ではそんなことも麻痺しているといっても過言ではない。
「簡単に言いましょう。ほどなく君は、主に見付かった。そしてあの画家と一緒に暗い地下の部屋に閉じこめられ、贋作を描くことになった。当て推量ではありますが模倣する才能に長けていたため暴力から免れることができた、とかではないでしょうか。そして、逆にそこを利用された…違いますか？」
相手は俯きがちに横を向き、唇を噛みしめていた。
暗い地下室でマフィアの恐怖に怯え、絵だけを描かされ続けていた子供が、深夜の侵入者に一縷の望みを見た、それを浅知恵と嗤うことも出来るが、骸はそうはしなかった。
「…監視はすべてこちら側に来たのでしょうからねえ…」
マフィアの元で偽絵を描くなど同情すらする。元々監視も緩かったところに、襲撃とくれば子供一人くらい抜け出すことも可能だろう、あるいは見張りなどいなかったかも知れない、塀の内側には犬が放されていた（その犬は犬が処分した）。
「真似が、出来るのは本物が分かる、から…で、だから覚えるのも早いって…」師匠が。
骸は小さく頷く、もともと彼の師匠とやらは腕の良い修復師だったのだ。
あたら才能があるだけにマフィアに使われた。
――彼も少年も。
小さな贋作画家ですか、と吐き捨てるように呟く。
「…あの、ほんとは、」
遮って首を振る、聞く必要がない。
「僕は屋敷の主とは面識がありませんし、怨みもないですよ。用はありましたが、関わりはない。当然、きみの抱える問題とも」
子供は黙って骸を見詰めた。その顔には失望の色がありありと浮かんでいる。
あの何と言ったか、屋敷の主は単なる船舶製造会社の社長だ。屋敷も仕事も親から継いだものだが巧妙に武器の部品を混ぜ込んでは小狡いやり方でのし上がり、いまでは公然と武器製造の一部のルートを担い、国内企業のトップスリーにあげられるほどになっている。犯罪ま

がいのことも多くやっており、表裏に精通していることでも知られている。揉み消された訴訟の数は知れず、逮捕歴も奇跡的に、ない。年の半分を過ごすという屋敷では地下を画室にし、友人であるマフィアに預けられた贋作画家を閉じこめている。地下室は贋作工房だ、しかし地上で高いびきをかいている一人の男の破壊と金庫に眠る証書の破棄という骸の仕事にはまるで関係なかった。

「この絵を持ち出したのはどうしてですか?」

骸は母親とは会っていないのかという問いの代わりに敢えて質問する。

「…それ、は…」

おかあさんだから、と呟くように答える。

「そうですか」

骸が信用できないと知った以上、言うわけにはいかないということだろう。

「君にとっての正義の味方にはなりませんが、ひとつ、いいことを教えてあげます」

「?」正義の味方という単語が理解できないようだった。復唱するように小さく繰り返し、子供は首を傾げる。

「僕は、マフィアを憎んでいる」

相手は何も言わなかったが、それでも真っ直ぐに骸を見返していた。

「オレ、は…」

マフィアじゃないと言いたいのか。そんなことは分かっている。目といい、仕草といい、そうなるべき育て方をされていない。

「あの場所ではいけないから。どうしても、その…めが、…」

「『め』? 視られるべきものなのにその機会がない、と?…それは絵があのような地下の暗い場所にあるのは相応しくないという意味ですか」

「ふさわしく…ない」

相手は確かめるように一人言ちるとないです、と骸に目を合わせて繰り返す。

「……」

――〝め〟、が。

ああそうか、と理解する。

「…しばらくしたらきみを解放します」

声だけじゃなくて、味方でないと分かっても引こうとしない大胆なほどの決定力だ。彼自身、気付いてもいないだろうが、瞬時にひとを見極め、敵味方かを峻別する能力がある。それはきっと真贋を見抜くのと同一線上に成り立っている。

どうして連れて帰ったのかなんて。

「愚問ですね」我ながら。

ワンコールで相手は応える。

――骸様。

抑揚もないが声には僅かな安堵が滲んでいる。もうこの電話から連絡するなど骸も考えてなかったし、相手もかかってくるなど予想もしなかっただろう。通信端末は使うそばから破壊することにしている。

「出る前に犬を寄越しなさい」

――…はい。

「ボンゴレに預かって欲しいものがあります」

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

――ボンゴレに？
「おもしろいものを見付けました、あちらなら乗ってくるでしょう」
――何かなさるのですか、骸様。
「僕は何も。動くのはボンゴレでしょう、お前達にも任せたいことがある」
――はい。
千種は感情の振り幅も狭く、表情といったものは僅かにしか出ない。何にしろ淡泊なのだが骸の言葉だけは別だ、必要とされることを素直に喜ぶ。お任せ下さいなどとは言わないが、面倒げな素振りとは裏腹に何が何でもこなしてくれるだろう。
「まずは沢田綱吉に届け物です」
返答の間を与えずに通話を切り、端末を捨てる。
気紛れにだが今日まで処分せずに置いておいたこれが偶然なのか、必然だったのか、あるいは何かの予兆なのかは骸にもわからない。

「並盛神社の一部が壊されてたんだけど」
雲雀は狭い沢田綱吉の部屋に立ち、腕を組んで赤ん坊を見る。沢田は雲雀を部屋に通した後、リボーンたちで飲みきってしまったという飲み物を大急ぎで買いに行っているところで、いてもいなくてもいいのだが、でも自分は飲み物なんて別に要らなかったのにと雲雀は内心、思っていた。
「あれ、君たちのせいなの？」
赤ん坊は表情がまったくといっていいほど読めない。
「……」
「また変なもの作るとか」
聞いてねーな、と赤ん坊は言下に返す。見れば、用意されたおやつなるカップケーキは完食され、ベッドの上に胡座をかいて座っていた。
「ヒバリは故物も扱うのか？」
「？」
赤ん坊が何を言いたいのか分からない。赤ん坊は雲雀に対してははっきりしたことしか言わない、訊くことで何かを確かめたがってでもいるのだろうか。
「オークションのリストに名前があったな」
「参加する日本人などいくらでもいる」
雲雀姓が少なかったとしても、世界的に有名で誰でも参加できるオークションは数多にある。しかも何か特殊なことがあった場合でも購入者が保護される法律が日本にはあり、その点が警戒されたりもするらしいが、いかんせん市場である、厳かなりに動いているものだ。そんなところにじっとしているのは暇な輩だけだろう。赤ん坊が何を調べているのか知らないが、雲雀にとってはどうでもいいこととしているうちの一つなので答えもぞんざいになる。
「僕は知らない」
「興味ねーのか」
「ない」風紀的に問題がなければの話だが。
赤ん坊はふうん、と考えるような唸りをあげると腕を組んだ。誤魔化しでもなく、本当に考えているようだ。
「骸が、ツナに預けた物がある」
「六道骸？」

故物に六道骸、妙にしっくりくるようで嫌な取り合わせだ、きっと胡散臭さが共通するからだ。あの男ときたら鳥に入ったり、幻覚に仕立てられたりと曲芸をひとしきりやったのち、沢田ともう一匹の草食動物とのいざこざで、囚われの身から解放されたというのに、わざわざ雲雀が学校にまで乗り込んでやっても不在のことが多く、まともにやり合えてない。

「それいまどこにいるの」

「さあな。仕事終われば戻るだろ」

行ってもいないわけである。一時期、あろうことか並盛中にコンタクトが取れる少女だけを置いてどこかへ行っていたが、そのときは不在の理由を赤ん坊達に告げていたらしい。今回も知っているのだろうが、言わないところがむっとくる。

「他のは黒曜にいるんだ、骸の単独行動はいまに始まったことじゃない」

「…その六道骸が何かしてるの？」

赤ん坊は少し黙ってから雲雀を見上げる。口ぶりからして六道骸だけがいまどこで何をしているのか不明らしいということが察せられた。

「ツナが、厄介に巻き込まれる気がする」

「なにそれ」学校にそれ持ち込まないでよね。

「まあオレの勘だ。ダメなだけに厄介を引き寄せる能力はハンパねえからな」

確かにそうだ。いつだって面倒なことは沢田絡みなことが多く、まるで彼自身が引っかけるなりして寄せているように思い始めている。本人の意向はどうあれ、雲雀とは違うそういった人種はいるのだ。

「何かあったら助けてやってくれねーか？」

「嫌…」

と雲雀は口にしかけて黙る。赤ん坊も六道骸の動きを少しでも分かっていたらこんなことを雲雀に言いはしないだろう。沢田に物を預けている以上、六道骸のことだ、必ず目の前に姿を現すだろう。そうでなくともコンタクトはとろうとはするはずだ。それに加えて、並盛では現在、野良犬の被害の報告がある。おおかた山にでも捨てたのだろう、猫はまだしも、犬は野生化すると質が悪い。飼い犬にさえも無駄に吠えられる沢田が襲われる可能性はどうしたって高いに決まっている。

「そうだね、貸しにするなら考えないこともないよ」

気に入らない部分はあるが、妥協する。ニッと赤ん坊は笑った。

「オレは戦わねーぞ」やるのはツナだ。

「おもしろければ構わない」

さて話が済んだ、もう沢田家にいる必要もなく、雲雀は窓から帰ろうとするが玄関に靴を置いてある、赤ん坊は何も言わず、少し考えてから沢田を待つことにした。風紀の仕事はやり残しているし、居るだけなのも退屈なのだがとりあえずと室内を見回す。

「……」

物は多くないが、適度に散らかった部屋だった。

塵や埃はないから母親がまめに掃除しているのだろう、机には整えられた教科書とノートがあり、引き出しからはテストらしいプリントはみ出ている。授業で作ったかしただろう棒状の筒が隅に立てかけてあった、持って帰ったきり放置されたというようで、ベッドの下にからも何かの包みの一部がはみ出してもいた。引き寄せてみると板状の、どうやら絵のようで雲雀は包みを眺めて見てから押し遣って戻す。座っ

http://wwbtd.mods.jp/menyoh/

た左側にはマンガ雑誌が教科書とともに重なっており、壁側に寄った小型のテレビからはゲーム機のコントローラーが投げ出されるようにゲームの箱の上に置いてあった。普段の沢田の姿が容易に想像される。机に向かうこともなくベッドに寝転がってマンガを読み、子供たちと騒ぎながらゲームに興じているのだろう。

「ただいま！」

ドアを開閉する音と共に沢田が戻り、ばたばたどすどすと足音を立てながら階下で忙しく物音を立てては子供と言い争っている声が届いてくる。

「……」

アホ牛め、と赤ん坊は呟きベッドから降りる。

「ダメだって！　これはヒバリさんの！」そもそもちっとも反省してないじゃないか！

「ランボ、ダメ、離す」

「わるものにやるんなら、ランボさんの方がいいんじゃないのー！」

子供ならではの利己的な発想だ。恐らく沢田が来るだろう後を子供の一人が追っているに違いない、部屋に近付こうとしていた足音はぴたりと止まった。

「ばっ、違っ！　ランボ！」

がしゃん。

雲雀は立ち上がり、ドアを開けてそこに寄り掛かる。何を期待しているわけでもないが、沢田の声は思いがけず力強く聞こえた。

「ヒバリさんは悪いひとじゃないけど何考えてるかわかんなくて強くて怖いひとなんだから！」

「……」

あっという気まずい声がした。雲雀は黙って腕を組む、赤ん坊は格好でもつけるように平坦な声で言う。

「…気にするな、ヒバリ」間違ってねーんだから。